



第五卷 第參號

大正九年七月一日發行

(通卷第十九號)

研 究

輓近の歴史哲學と社會哲學 (上)

文學博士 米 田 庄 太 郎

一

夫れ社會學と歴史哲學とは歴史的に甚だ親密なる關係を有するものにして、社會學を始めて組織したコントの社會學は實際に於て一種の歴史哲學に外ならぬとも云はれて居る。而して其の後社會學と歴史哲學との關係は常に社會學者の問題となつて居るが、今日此の問題に付て社會學者の下し

て居る見解は大體上三種に別れて居る。一は歴史哲學は社會學の準備をなせるものにして、夫れは宛も星占術が天文學に對して、又錬金術が化學に對して有すると同じ關係を社會學に對して有するものである。隨ふて社會學の成立せる以上は歴史哲學は當然消滅すべきものであると見る見解である。二は歴史哲學と社會學とは只名稱が違ふて居

るだけで實質は同じものであると見る見解である而して三は歴史哲學は社會學の上に立ち、社會學の結果と他の人類生活に關する科學の結果とを、一層高い見地からして總合せんとする一の獨立なる科學であると見る見解である。併し歴史哲學と

社會學との關係を右の如くに觀念する人々は、何れも歴史哲學をも矢張り社會學と同様に自然科學と觀念するものである。余は茲に其等の社會學者の歴史哲學概念を自然科學的歴史哲學概念或は自然科學的歴史哲學(Der naturwissenschaftliche Geschichtsphilosophie oder die naturwissenschaftliche Geschichtsphilosophie)と稱して置く。然るに近來主として獨逸の新理想主義の哲學者によつて、右の自然科學的歴史哲學概念の外に新理想主義的歴史哲學概念とも稱す可き新しき歴史哲學概念が大に發達して來て居る。而して余が茲に輓近の社會哲學との關係を考究して見やうと思ふのは、即ち

此新しき歴史哲學概念、新理想主義的歴史哲學概念であるのである。されば以下單に輓近の歴史哲學と云ふは、つまり此の新理想主義の歴史哲學を意味するものであることを記憶されたい。

今輓近の新理想主義的歴史哲學の概念及び問題は主としてウインデルバント、デイルタイ、ジムメル、リツケルト等の獨逸新理想主義の哲學者によりて發達せるものにして、其の近き淵源をカントの哲學に發するものである。併し今日までの處で之を其の最とも完成せる形態に於て組織的に論述したのはメーリス氏である。Dr. Georg Mehlis, Lehrbuch der Geschichtsphilosophie. 1915. 余は近々に「輓近社會思想の研究」上巻別冊として公にせんとする輓近の歴史哲學に於て、新理想主義的歴史哲學の發達を可なり詳しく論述するつもりであるから、茲には只メーリス氏の著作によりて其の最とも完成せる形態の一般を、極簡單に説述する

に止めて置く。

二

却説メーリス氏は軌近歴史哲學の淵源をカントの哲學に於て求めて居る。是れは一見すると奇怪に感ぜられる見解である。と云ふのは學者間に熟知される如くカントは歴史は學問でないと思つたからである。併しメーリス氏は甚だ深い處に目を着けて、カントの哲學を以て軌近の歴史哲學の淵源と見るのである。同氏は先づカントの創説せる新しき眞理概念に着目して居る。而して此の新眞理概念が先づ軌近の歴史哲學の成立を可能ならしめたのであると論斷して居る。

夫れカント以前に一般に行はれて居つた眞理概念は、認識摸寫説アプビルトヤウツによりて立てられたる物であつた。然るにカントは彼の先驗説によりて眞理概念を全く一變させたのである。要するに舊認識論にありては選擇されたものゝ認識(eine Erkenntnis

des Auswählten) が取扱はれて居るが、カントの認識論に於ては認識の選擇、認識する精神の行なふ選擇(eine Auswahl der Erkenntnis, eine Auswahl, die der erkennende Geist vollzieht) が取扱はれて居るのである。此くて認識の對象が無限になつて居るから選擇の業、材料の單純化、調節及び構成の業は認識の業でなければならなくなる。

併し此の材料の選擇及び構成は決して隨意的な箇人の性質によりて制約されて居るのではなく、必然的な不變な原理に従がふものにして、此等の原理は心理的機制シキカニキを支配し、意識の構造に準じて一の統一的及び必然的世界象(ein weltliche)を産み出すのである。選擇或は總合の此等の形式、即ち範疇は箇人の箇性から獨立して妥當するものである。此くて此等の形式或は範疇は眞理の形式である。此等の形式が内容を判斷に於て結合するが故に彼等によりて始めて論理的意義が産まれるのである

理論的命題の眞理及び妥當は此等の形式に依りて定まり、而して此等の形式は變動する認識内容に對して一切の内容的認識を制約する選擇及び結合の永久不變なる形式であるのである。

併しカントは此の普遍的眞理原理と相並んで第二の原理を立て、居る。而して此の第二の原理が彼をして認識の領分から歴史學を排斥するに至らしめたのである。然らば其の第二の原理とは如何なるものであるかと云ふと夫れは即ち一切の特殊は一種屬的、普遍的カツツングスノットヒアルゲマインに基いて立ち、箇別はあるがまゝでは眞理を有しないと云ふ思想である。カントは箇別を常に一種屬概念に結び付け、其のエキゼンツワール例として考たのである。要するにカントは認識價値の充實には先驗原理の外に攝容の原理(三)、Substanzbarkeitが必要であると考へたのである。然るに歴史的事實は二度と繰り返すことの出来ない一度性アイマリヒカイゼンのものであるから、夫れは到底種屬的

普遍の中に攝容され得ないものである。此くて歴史は認識の領分から排斥される事になる。約言すればカントは妥當の概念としての先驗の概念アプリアリに於て新しき眞理概念を發見した。併し彼はあまり自然科學に興味を持ち過ぎたが爲めに妥當の概念をあまりに狭く解し、歴史的判断の問題を全く排斥したのである。彼は自然科學の問題をあまりに偏重したが爲めに只普遍者、普遍的概念にのみ眞理價値を認め、只普遍者の形式が存在するのみで、インデビツユエレ、アインマリケ箇別者、一度者の形式は存在しないと考へたのである。さればカントは先驗の原理によりて歴史の認識を可能ならしめたと同時に、又攝容の原理によりて之を不可能ならしめたのである。而して攝容が認識に續く可からざる一原理と見る彼の見解を修正するに非ずば歴史の認識は不可能となるのであるが、最近の新理想主義哲學者は此の見解を修正する事によりて歴史科學を可能ならしめ

たのである。

尙ほ晩近の歴史哲學の淵源をカントに求む可き重要なる理由は、カント哲學に於ては文化への強き傾向が発見されると云ふことである。吾人はカントの哲學を文化哲學として觀念せねばならない彼れ以前にあつては、哲學的思辨は嘗て吾人の最高文化財たる學問、藝術、道德、法律、國家及び宗教等を彼れに於けるほど深く又徹底的に取扱ふた事はない。文化財の理解によりて實在の理解に進まんとする事は實にカントが始めて開いた新しき途であるのである。而して其方面よりし彼も亦歴史哲學の問題に近づき、幾多の歴史哲學的論説を書いて居る。要するに彼は實在の意義は只文化價值によりてのみ決定さる可きものであると云ふ原理を歴史哲學にも適用し、而して歴史の意義は只自然を征服すると共に自然より遠かることに於てのみ存し得るもの、又歴史の終極目的は眞正なる文

化の世界であらねばならぬものと考へたのである。但しカントは學問を全く自然科学的に決定する偏見に陥りし如く、又文化を全く倫理的に決定する偏見に陥つたのである。

茲に晩近の歴史哲學の發生に關して、カントの哲學が如何なる意義を有するかを簡單に説述すれば左の如くであると思ふ。即ちカントは先づ一の新しき眞理概念、先驗の概念を造ることによりて歴史の眞理内容を理解する可能を保證した。併し彼は又第二の標準として鑷容の原理を立て、特殊者の眞理は普遍者であること考へたことによりて、其の新眞理概念の効を大に制限して仕舞ふた。次にカントは歴史的興味と哲學的興味との間に強大なる共同性の存立する事を證明し、之れによりて哲學を文化哲學ならしめた。而して其の共同性の基礎となるものは即ち文化價值であるが、然るにカントは其の文化價值をあまりに倫理的に觀念

する弊に陥つた。さればカントは哲學と歴史とを結び付け晩近の歴史哲學の概念を可能ならしむるに必要な最も根本的なる原理を確立したが、而も直ちに之を確立したのではない。カントの思想よりして晩近の歴史哲學の概念が完全に生れ出づる爲めには二つの條件が必要であつた。其一は單に或は主として倫理的なる文化概念を修正し歴史的與料の單に或は主として倫理的なる評價及び判斷を修正して、完全なる文化概念を樹立する事である。而して此條件を先づ充たしたるものはヘーゲルの歴史哲學であると思はれる。併しヘーゲルの歴史哲學は歴史的眞理の認識的論證を全く缺いて居る。さればヘーゲルによりて文化概念の根本的修正は行はれたが、而も晩近の歴史哲學の概念に於て其最も重要なる一要素となつて居る處の歴史の認識論的論證は與へられて居らない。而して此論證を與へることが實に第十九世紀の終り頃

より第二十世紀の始めにかけて獨逸の新理想主義哲學者の大に力を注げる最も重要な一問題となつたのであるが、此の努力によりて第二の條件が充たされたのである。夫れ歴史の認識論的論證を與へる爲めには、攝容及び普遍的法則の概念によりて加へられたる其の制限をカントの眞理概念より除き去ることが必要であるが、之を成就せしものは、實にロツツエ、ジグワールト、ディルタイ、ジムメル、殊にヴァインデルバント及びリツケルト等の連續的努力であつた。而して吾人はリツケルトを以て此の連續的努力の結果を完成せるものと認めることが出来る。蓋しリツケルトは彼の立てたる「與へられたるもの」の範疇によりて、事實の眞理内容を認識論的に確立し、而して歴史的因果を法則の概念より解放することによりて歴史的方法の特有の價値を明かにしたからである。

今一方に於てはヘーゲルの哲學によりて、他方

に於ては上に述べし諸家の認識論的及び方法論的研究によりて、カントの眞理概念及び文化概念に加へられたる修正が、茲に一の獨立なる哲學的學科として軌近の歴史哲學を發達させたのであるが然らば其の根本的問題と認めらる可きものは何んであるか。

夫れ軌近の歴史哲學の問題を總括的に整理したるはリツケルトの功績であると思ふ。蓋し歴史的方法の問題から普遍史(Universalgeschichte)の問題への學問的通路を開きたるは彼れであるからである。而してリツケルトの説によりて歴史哲學の問題を總括的に整理すれば先づ左の如き三部門を立てることが出来る。

(1) 歴史の哲學的方法論、或は歴史科學の理論又は論理學、或は簡單に歴史論理學ゲッシュヒストロイキヤと稱す可きもの、而して此の部門に於て或は問題部類に於て考究す可き根本的問題は

(a) 歴史の目的或は歸趨の問題 Die Probleme des Zieles.

(b) 歴史の對象の問題 Die Probleme des historischen Objektes.

(c) 歴史に於ける形式と内容の問題 Das Problem vom Form und Inhalt in der Geschichte.

(d) 歴史の方法の問題 Die Probleme der Methode.

(e) 歴史的判断の問題 Das Problem der historischen Beurteilung.

然るに此等の諸問題の考究は、一切の歴史科學及び歴史的事象の根柢に存在する原理に自から吾人を導くものであるが、此の原理と云ふは即ち文化の觀念である。而して此の觀念は文化の多樣及び其の諸異の形態の意義を究明する爲めに又自から一の價值論を發達させる。斯くて歴史論理學は

自から歴史的價值論に移るのである。

(2) 歴史の哲學的價值論、或は歴史<sup>ヒストリツセ、ウエルトルレ</sup>的價值論、此の部門或は問題部類に於て考究せらる可き根本問題は

(a) 妥當の問題 Das Problem der Gekung.

(b) 文化價値の作業問題 Das Leistungsproblem der Kulturwerte.

(c) 文化價値の構造問題 Das Strukturproblem.

然るに歴史哲學は一切の歴史<sup>ウエルトルレ、ユグデーベン</sup>的會得の必然的原理であり、又自然科學的法則が自然科學の眞理内容を確立すると同じ仕方、歴史の學問的性質を確立する其の普遍者である處の諸文化價値を分析したる後、自然的に普遍史<sup>(die Universalgeschichte)</sup>の問題に進まねばならぬ。

(3) 普遍史、歴史哲學は普遍史の部門に移ることに於て、學問論の領分を去つて即ち歴史の學問を取扱ふことを止めて現實なる歴史的事象其物を取

扱ふことになる。即ち如何に原理が歴史的生活の生きたるすがたと結び付き、此の生活に意義を與へるかを示すことが問題となる。普遍史は歴史の論理的考察の如く一の抽象的形體として歴史的事象を取扱ふのではなく、如何にして又如何なる主意にて無時間的及び永久なるものが、時間的及び有限的なるものと結合に入り込むかを決定することを其の職分となすものである。而して先づ其の一般的問題として理性の二律背反、哲學のオルガノンとしての歴史、普遍史と哲學及び科學との關係、進歩の概念、生きた内容性、發達の概念、價値増長及び價値高上等の諸問題を考究し、次に其の特殊の問題として、

(a) 價値と時間との關係

(b) 歴史的事象の可能的意義表示 Die Mогlichen Sіngebung des historischen Geschehens.

(イ) 宗教的意義表示



(ロ) 科學的意義表示

(ハ) 哲學的理論的意義表示

(ニ) 倫理的意義表示

(ホ) 審美的意義表示

(ヘ) 包括的及び統一的意義表示の問題

余は以上述べし處によりて、甚だ大體上に止まるが、兎に角今日新理想主義の哲學者によりて歴史哲學の概念及び問題は、如何に決定されて來たかを示したと思ふが、然らば今歴史哲學の概念及び問題を右の如くに決定するに於ては、夫れは矢張り新理想主義の哲學者間より發達しつゝある軌近の社會哲學と如何なる關係を有するか。要するに軌近に新理想主義の哲學者の一派が歴史哲學として新たに建設せんと企だてつゝある哲學の一派は他の新理想主義の哲學者の一派が社會哲學として新たに建設せんと企だてつゝある哲學の一派として新たに建設せんと企だてつゝある哲學の一派と、只其の名稱を異にするだけで、實質に於ては

同一物であるのではあるまいか。余は次節に於て軌近に新理想主義の哲學者の一派が建設せんと企だてつゝある社會哲學なるものは如何なるものであるかを矢張り極簡單に説述し、終りに軌近の歴史哲學と社會哲學との關係を究明したいと思ふ。